

命
く
ミ
ツ
シ
ヨ
ン

安達 真魚



越後湯沢の紅葉(2022.11)

Image in a dream

夢の中の街角 作り変えたすじがき

どこかで見た道筋 移り変わるスペクタクル

君が現れて 昔のいでたちで

問いかけてくる そう、昔のように

空虚でうつろな すぐに消えていく人の憂い

After image in a dream 夢の中のストーリー

夢の中で語りかける 途方もないフィクション

理解できない言の葉 ありえない波乱の中

僕は引き下がり 遠くでこまねいて
平気な顔で そう、昔のように

空虚でむなしい いまや重なってる過去と未来
Double image in a dream 夢の中のストーリー

夢が醒めないように 君だけ追い続け
見続けていた そう、昔のように

空虚で悲しい それはいじらしく胸が痛む
Empty image in a dream 夢の中のストーリー

トワイライト

もうたそがれどき 今日の終りも近い
夕焼けに浮かぶ 山並みシルエツト
夜の闇がせまる 薄明り輝いている
これまでの夢は もう満たされている

トワイライト 西の空陽は落ちる
今日のつたなさは 明日乗り越える

もう染まっている 君の横顔は薄紅に
街の通りの灯 感じるあたたかさ

夜のとばり下りる 街はイルミネーション
これまでの不幸は もう忘れかけてる

トワイライト 今日1日が終わる
今日のはかなさは 明日乗り越える

トワイライト 西の空陽は落ちる
今日のつたなさは 明日乗り越える

想いはいつまでも

よみがえる記憶 かけぬけた山や川
こみ上げる寂しさ 逝ってしまった数多の同志

どこまで戦えば 平穏なときが
どこまで傷つけあえば おだやかな日々が

富士を仰いで 唇噛みしめる
想いはいつまでも 心のなかに

つらぬいた覚悟 矢のような時の流れ
隠せない悲しさ 数えきれない失ったもの

どれほど争えば 安らかなときが
どれほど討ち果たせば 静ひつな日々が

駿河の海を 遠くに見渡して
想いはいつまでも 哀れむままに

想いはいつまでも 心のなかに
想いはいつまでも 哀れむままに

ももへの手紙

ありがとう
長い間ありがとう

あなたは、とても手のかかる子でした
もう何回、人を噛んだでしょうか
わがままな子でした
寂しがり屋の子でした

あなたはどこから来たのでしょうか
奈良県でしたね、大和の国でした

故郷では生まれたばかりで、ずいぶん怖い目にあっ
たのでしょうか

警戒心の強い子でした

外に連れ出すと、いつもびくびくして、震えが止ま
らなかったですね

家の中では、いつも一緒でしたね

食事のときは、リビングへ

デスクにいるときは、足元に

寝るときは、寝室に

東日本大震災のときも、一緒でした

その後の余震のときも、いち早く寝室へ逃げて行きましたね

地震は人間より早く察知していました
テレビの警報の音にも敏感でした

あんパンと干し芋のおやつが大好きだった

トイレはお粗相が多くて、手がかかりました

ウンチの始末も大変でした

最後は、咳が止まらず苦しかったね

でも、よく頑張りました

十四歳七ヶ月の命だったけど、ずっと家族みんなを

癒してくれました

励ましてくれました

でも、もうひとりで留守番しなくていいんだよ
もうゆっくり休んでいいんだよ
ほんとに、ほんとに、ありがとう





晩秋、山中湖の夕焼

たそがれ

「たそがれ」を漢字で書くと「黄昏」になる。「誰そ彼」が語源らしく、「そこにいるのは誰ですか」という意味だ。「誰ですか、あなたは」と言われるくらい相手にされなくなっていく状態のようだ。また、「たそがれる」は、うらぶれる、落ちぶれる、色あせる、見る影もないなど、あまりいい響きではない言葉である。しかし、高齢者は、みんな一応、「たそがれた人」なのである。

あるとき、英語の得意な仲間「たそがれ」を英語で何というか尋ねたことがある。答えは、「トワイライト」だと、即答された。そうなんだ。なんとも心地よい響きである。

たそがれ時は、一番光り輝くときだとよく言われる。日が没して暗闇になる前のひと時の輝きは、人生においても同じだ。世を去る前の幾ばくかの時間は光り輝く時間でもあるのだ。

確かに、齢を重ねれば、身体能力は落ち、病気がちに

なり、孤独にもなり、介護を受けるようになるかもしれない。高齢者には、それぞれ個人差もあるが、たそがれ時は、それら乗り越えて、残された自由な時間を謳歌できる、一番楽しい時間であってほしいと思う。

生まれた年代によって、「団塊の世代」、「バブル世代」、「団塊ジュニア世代」、「松坂世代」、「ゆとり世代」、「Z世代」などといういろいろと呼ばれる。ここでは、生まれた年代関係なく、高齢者を「トワイライト世代」と呼ぶことにし、トワイライト世代の一人として、気になったことを書き留めておきたいと思っている。トワイライトが、淡い光であっても、物忘れが多くなっても、少しでも楽しんでいく時間だと心得えていきたい。

卒業できていない夢

夜寝ていて見る夢は、いつも脈絡がなく、とんでもないストーリー展開になっていくのが普通だ。それも、自分が実際に経験したことがベースになっていることが

ほとんどだ。亡くなった人を含めて、覚醒時ずっと気にかかっていた人が、夢に現れることもよくある。

若い頃から、似たような内容の夢を連続的に見ていたことがあった。それは大学をまだ卒業できていない夢だ。大学を卒業して相当な時間が経ち、すでに、仕事もしているはずだ。しかし、なぜか、まだ卒業できていないとか、卒業できるのだろうかとか、とにかく卒業ができた、できないに疑念を抱かせるような夢だ。

このようなネガティブな夢を繰り返し見るのは、卒業するのに苦労したからに違いないが、潜在的な記憶がトラウマになっていることは容易に想像できる。実際にも、学校の授業はほとんど受けず、単位を取得するのに相当に手こずったというのが現実であった。当時、入学直後から学生運動のために学部はロックアウトし、最初の半年は、ほぼ授業がなかった。これは弁解に過ぎないのだが、そんなことがきっかけで、勉学に励むことはできず、興味も持てていなかった。結局、1、2年で科目の大半を落とし、3、4年で、つじつまを合わせ、なんとか4年で卒業できたような状況であった。親から、学費や生

活費を仕送りしてもらっている身としては、4年で卒業できないことは許されるものではなく、当時、相当なプレッシャーになっていたと思う。

高校、大学を通して、もう少しきちんと勉強しておけば良かったと気づいたのは、仕事に就いてからであった。また、選んだ学部、学科、就職先など、もう少しよく考えるべきであった。ただ、後悔先に立たずで、人生はそんなものかもしれない。卒業できていない一連の夢は、これらの象徴的な夢だと思っている。

しかし、このような夢を連続して見るのは、自分一人ではないということも、後になってわかった。何かの機会に、身近な知人に対してこの種の夢を見ているか質問したことがあるが、高い確率で、同様な夢を見ていることがわかった。少なくとも数人以上はいる。いくら成績の良い人でも悪い人でも、人それぞれに、学業成績の優劣や卒業しなければならぬということに、プレッシャーやストレスを感じていた人は多かつたのだろうと確信を得た。

それでも、高齢になるにつれて、このような夢を見る頻度は少なくなってきた。しかし、絶対に見ないところまでには至っていない。ただ、今でもこのような夢を見ると、夢うつつのなかで、「何かおかしいな」と思ってしまう。

この数年、日常的に摂取しているサプリメントのせいかわからないが、夢を見やすくなったというか、夢を覚えていくことが多くなった。夢を覚えているのはレム睡眠（浅い眠り）ときが多いといわれているが、それが良いことなのか、悪いことなのかはよくわからない。それにしても、夢を見るなら、「気分の良くなる夢」とか「昔の郷愁を呼び覚ます夢」など、とにかく「いい夢」を見たいものである。

高齢者とスマホ

NTTドコモモバイル社会研究所によると、2022年1月の時点で、スマホ、ケータイ所有者のうち、スマ

ホの所有率が94%を超えているようだ。2018年では、やっと50%を超えたくらいなので、ここにきて急速にスマホの普及が進んだ。ガラケーのときもそうであったが、高齢者ほど、このような情報通信機器の普及は遅れる傾向にあるが、この数年で高齢者のガラケーからスマホへの買い替えが急に多くなったようだ。高齢者のスマホへの買い替えは、キャリア側からの販売促進などに加えて、ガラケーがほとんど販売されなくなり、子供などにもすすめられたりすることがきっかけになっていることが多い。まず、家族LINEとその無料の電話を利用して、家族間の連絡を確保するといったケースがよくありそうだ。

それにしても、この数十年で、通信のスタイルはあっという間に、手紙、固定電話の時代から、ケータイ、スマホの時代が変わってしまった。改めて自分の通信手段の経歴を不鮮明な記憶を思い出しながら、少したどってみることにする。物心がついた頃は、家業の関係で、電話はすであった。ダイヤル式ではなく、交換手を介し

て通話するものだ。相手に電話がなく、急用の場合は電報だった。当時、田舎ではまだ電話の普及はさほど多くなく、近所の人が電話を借りに来る時代であり、通信手段は郵便が主体であった。

上京して一人暮らしを始めたが、電話を所有することなどは考えられなかった。今思うと、仲間などとの連絡はどうしていたのだろうかと思ってしまう。手紙、公衆電話が中心で、アパートの家主の電話を利用させてもらったりしていたこともあった。首都圏の自宅から学校に通っていた仲間などへの連絡は、公衆電話からできていた。ということ、すでにこの頃、少なくとも首都圏での電話の普及率は高かったといえる。学校のサークル活動などでは掲示板が利用され、駅には伝言板があった時代だ。自分の電話機（固定電話）を所有したのは、仕事に就いて何年も経った後だった。緑色のダイヤル式だった。プッシュ式も選択できたが、プッシュ回線は使用料があったので、そのときは選択しなかった記憶がある。テレフォンカードが販売されたのもこの頃だ。その後、電話機は、家電販売店で購入したものを利用するようになった。

た。親子電話機やFAXのついた電話機を利用したときもあつた。

モバイル系では、仕事用のポケベルから始まり、携帯電話はIDO（日本移動通信）、J・F・H・O・N・E、Vodafone、SoftBankへと推移している。携帯電話普及前に、「自動車電話」が備え付けられた車に同乗させてもらい、走行しながら固定電話と通話しているのを目の当たりにしたときは感激したものだ。スマホは、iPhone4から使用している。このような携帯電話からスマホへの使用経歴は、人によって使い始めた時期が少し異なるものの、その時代の技術や機器、供給スタイルなどに応じて、それぞれ似たような経験を積んではずである。

固定電話であるが、これだけ携帯電話やスマホが普及しても、自宅の固定電話はまだまだ止めない人は多い。高齢者ほどその傾向は顕著だ。それぞれの人の信条があるので、「止めたほうがいい」とまではとても言えない。ただ、固定電話を持つ意味がなくなってきたのも確

かだ。携帯電話が普及しだした頃は、何か契約するときなどにまだ固定電話の番号が必要だったときがあつた。しかし、今は、携帯電話の番号で十分になっている。

自分は固定電話をずいぶん前に止めているが、そのときは、やはり躊躇した。しかし、結果的に止めて困ったことは一度もなかった。固定電話には、親族や親戚からほんのたまに電話があるくらいで、他には、葬式屋か畳屋などの販売促進のお知らせ電話があるくらいだった。すでに携帯電話やスマホが普及している高齢者世帯の固定電話を一斉に止めたら、振り込め詐欺などの特殊詐欺は激減するような気がする。

いずれにしても、スマホの普及で多くの人が、連絡の取りやすさの恩恵を受けている。勿論、メールでのやりとりの重要性は従来どおりだが、LINEなどの通信アプリは手軽でいい。ただ、スマホは所有したが、LINEはやらないという変わり種の人もある。理由は別として、これも信条だからどうにもならない。この場合、SMSで連絡し合うことになる。SMSでは長文を送れな

いので、相変わらず文の長さを気にし、2回に分けて送ることもある。また、メールやLINEのように複数人に一斉に送れないので効率も悪い。

スマホを所有するということは、小型のPCを持ち歩けるようになったということだ。それもPCだけでなく、ありとあらゆるというのは大げさかもしれないが、スマホのアプリの種類だけ持ち歩ける可能性がある。身近なものだけでも、電話利用以外に、カメラ、TV、地図、予定入りのカレンダー、筆記具のいらぬメモ帳、万歩計、音楽プレーヤー、本、マガジン、お金（キャッシュレス決済）、さらに、時刻表（乗換案内など）、JAFなどの会員証、アラーム、懐中電灯、SNS通信、撮影した写真、動画の閲覧など、あげたらキリがない。スマホの所有によって、一気に多くの便利ツールを手にしたことになる。

高齢者であってもこれらの恩恵を受けるのは同じだ。しかし、普通の高齢者にとっては、それらのツールを最初から最大限に活用するのは大変だと思う。背景に、スマホはPCの所有を前提としているようなこともあ

るので、なおさらである。

スマホにも、マニュアルはあるはずなのだが、操作に慣れていない人にとっては、ないに等しい。アプリの多くが無料なものもあり、供給側も使いこなしにあまり責任をもっていないようにさえ思う。PCの入出力操作に慣れていない人でも、始めてスマホを操作するときは、少なからず手こずるだろう。若い人は、頭の柔軟性があり、何でも吸収が早く、スマホに馴染むのも早い。小学校に入る前の子供でも、スマホを与えれば、すぐにピコピコ遊べるようになる。アプリ制作側も、キャリア側も、若い人は柔軟に操作できる人が多いこともあって、高齢者に対して十分な説明や教育を怠っているような感じさえする。高齢者は理解力、記憶力などが全般に低下しているもので、スマホの習熟も時間がかかる。ただ、きちんと説明、教育すれば、時間が少々かかっても、高齢者でも使いこなすことができるはずである。紙ベースで、マニュアルやチュートリアルを用意するなど、もっと丁寧な説明責任を果たすべきだと思う。

携帯電話、スマホの電話料金は、相変わらず高い。電話通話料金の基本が30秒20円くらいのスタイルは、ずっと変わっていない。固定電話の市内通話3分10円より、12倍も高く、IP電話3分8.5円よりも14倍高い。この高い通話料金を基本ベースにして、かけ放題〇〇円とか安く見せかけようとしている。固定電話の市内通話と同じ3分10円くらいに落とすべきだ。

それでも、このところスマホの月額料金は全体に安くなっている。楽天モバイルのキャリア参入が大きく影響していると思う。月1Gまで0円という画期的な料金設定がなくなつて残念だが、通話品質は別として、アプリを使った電話料はかけ放題0円という料金設定はありがたい。

せつかくスマホの料金も少しずつ下がっているので、高齢者も、楽しみながらスマホの操作を勉強して、もっと活用をしていったらいいと思う。

ドローン

ドローンは、もともとの開発目的が軍事利用だったらしい。今や小型化や低価格化が進み、民間においても活用の範囲は大きく広がっている。映画の撮影や物流・配達、危険な場所の点検、または安全管理や警備など、幅広く活躍している。災害時の状況把握など多くの場面でもその有用性や将来性が実証されている。2022年2月から続くロシアのウクライナ侵攻でも、兵器としてのドローンが話題になっており、現在でも戦局を左右する一つのキープポイントになっているようだ。ドローンの活用範囲は、今後ますます広がっていくことが予想される。

自分もいつかドローンを操縦して、上空から写真や動画の撮影をしてみたいと思っていた。それは自分だけでなく、多くの人がそのように思っているかもしれない。現実にはそんなに生易しいものではないことはわかっているが、実現の可能性を少し探ってみた。

まず、ドローンの主な活用範囲を自分の視点で改めて考えてみる。第一は産業用である。農薬散布などに代表される農業分野、測量・点検などの土木分野、物流・配達、映画の撮影など、応用分野は限らない。第二は、遊び、趣味用であるが、ここでは、大きく二つの志向性がある。一つは撮影、いわゆる空撮を趣味とするものである。一つは産業用と共通しているかもしれない。もう一つはドローンスポーツとしてとらえる分野だ。FPV（First Person View）といって、小型のドローンで、レースを行うものだ。ゴーグル（ヘッドセット）を身に着けた操縦者は、リアルタイムにその映像を見ながらレースを行うものだ。また、スポーツ用途としては、限られたゲージの中で戦うドローンサッカーのような遊びもある。

そんななかで、自分がやりたいのは、ドローンを操縦して行う空撮だ。それもいろいろな自然や街並みを空撮したいと思っている。しかしながら、それらを実現するには、クリアすべきいくつかの課題があった。

まず、ドローンについての基礎知識と飛行経験を身に

つけないといけない。基礎知識についてだけでも、機体のメカニクから、操縦方法の基礎、航空力学、電波工学、気象、関連する法律（航空法、電波法、小型無人飛行禁止法など）、条例、さらに販売されているドローンの状況など多岐にわたる知識が必要になる。これらすべてに精通しなければ飛ばせないということではないが、例えば、法律に反して飛行させれば、多額の罰金が課されるということもある。

飛行経験については、ドローンの操縦技術などを何らかの方法でスキルアップさせなければならない。ドローンを人口密集地（DID地区）で飛ばすためには国土交通省への許可申請を行う必要がある。その際に、10時間以上の飛行経験がなければならないので、飛行経験としては、飛行時間10時間が、一つの目安になる。ただ、10時間というのは、そんなに簡単ではない。ドローンはバッテリーで飛行するので、1回の飛行時間は限られている。充電するにも時間がかかるし、別のバッテリーをいくつか用意するとしても、バッテリーだけでも結構高価だ。これらの知識や経験を体系的に身に付けるには、

ドローンスクールにお世話になるのが手っ取り早い。これがドローンビジネスの一つの商売ネタになるように、ネット上でも、ドローンスクールの広告サイトが目立つ。

次に、費用面ではどうか。ドローンスクールに通うとすれば、基本的なコースだけでも、20〜30万円くらいはかかるようだ。その他に、資格申請費用などもかかる。空撮用のドローンの購入には、実用上を考えれば、これも最低20〜30万円くらいはかかる。さらに、撮影した動画を編集するためには、GPU（グラフィックボード）の付いたPCがほしくなるので、これも20〜30万円は投資しなければならぬ。その他、スクールや飛行場所までの移動費用や諸雑費も必要だろう。冷静に見て、ある程度の空撮動画ができるまで、100万円未満では足りない気がしてくる。それと、趣味とはいえ、大切な時間が消費される。費用と時間、それと自分自身のマンパワーを考えると、ドローン空撮を実現させるには厳しさを感じてしまう。もっと若ければ、少しは楽にチャレンジできたかもしれない。また、仕事であれば、

取り組みやすかったかもしれない。

2022年6月からドローン規制がさらに厳しくなった。ドローンの機体の重さ（バッテリーを含む）が100g以上の場合、所有者情報の登録および許可がないと飛行は禁止となった。これまで200g未満の機体は航空法の規制対象外だったが、100g未満に引き下げられた。100g以上の機体の所有者は、1機ごとに登録しなければならない。また、3年ごとの更新も必要だ。登録すると、「登録記号」が発行され、それを機体に表示する必要がある。さらに、地上から機体所有者を識別できるようにするため、飛行中は登録記号などの情報を電波発信するための「リモートID」の搭載が義務付けられる。この「リモートID」の搭載も所有者の負担になる。すでに、ドローンの運用は、自動車の登録や車検制度と似たような制度になっているのだ。

そもそも、ドローンを日常的に飛ばすことのできるロケーションは、きわめて少ない。市街地で飛ばすのは無

理としても、公園内だけでも飛ばしたいと思う。しかし、ほとんどの公園は条例などによって、ドローンの飛行は禁止されている。トイドローンと呼ばれる機体の重さが100g未満の飛行許可のいらぬドローンであっても、公園内での飛行はほぼ禁止されていると思った方がいい。

日本国内でドローンを飛ばすには、法律に従って各関係機関へ許可申請を行う必要がある。ただ、条件によっては許可申請を行わなくても良い場合もある。しかし、どんな場合であっても、許可申請とは別に、飛行させる土地の所有者の許可は得なければならない。例えば、ドローンスクールやドローン練習場にしても、そこはクリアできているからこそ営業ができています。見方を変えれば、土地を有効活用しているといえる。国有地での飛行も同じで、国有地の山岳地であれば林野庁の許可があれば、飛ばせることになる。山岳地の空撮動画も素晴らしいものが多いが、撮影するには山登りする体力が必要になる。いずれにしても、土地の所有者の許可が必要なことが、ドローンを飛ばすことの大きなハードルになって

いる。

2022年6月幕張メッセで開催されたドローンの展示会「ジャパンドローン」に足を運んでみた。展示会は、KDDI、ソニー、GM、NTTドコモ、ソフトバンクなど、主に産業用ドローンの展示であった。経済産業省の「空飛ぶクルマ」の展示もあり、ドローンスクールの展示も目立っていた。空撮用のドローンを購入するとすれば、メーカーはJDIと思っていたが、そのJDI自体の展示がなかったのは残念であった。

もう一つ残念なのは、この展示会は、日本のドローン技術の最先端の展示であるべきだと思うが、この程度なのかと感じてしまったことだ。日本のドローン技術は、中国など他国に遅れをとっていると言われているが、この展示会では、その一端が見えたような気がする。

日本は、ドローンに対する規制が厳しすぎるのかもしれないが、このことがドローン技術向上の障害になっていないだろうか。規制強化はいいのだが、産業用以外にも、ドローンを遊びとして楽しめるような環境を充実さ

せ、ドローン人口をもっと増やす政策を取った方がいいのではないだろうか。ドローン＝悪という考えはなくした方がいい。また、世界に恥じないドローン機体を供給できるメーカー育成にも力を入れてほしいものだ。ドローンだけではないが、NHKのプロジェクトXのような気持ちで、高度成長期の初心に戻り再チャレンジしてもらえたらいいと思う。他人事のようにになって申し訳ないが、もう少し日本にもがんばっていただけないかと願っている。

2022年12月5日施行予定の改正航空法では、レベル4飛行が一部解禁される。レベル4飛行とは、有人地帯において、目視の範囲外でドローンを自動・自律飛行させる方法である。解禁されれば、物流や災害支援などで、ドローン活用の範囲がさらに広がり、期待度は大きい。

そんなことで、ドローン空撮は諦め気分ではあるが、それでも100g未満のトイドローンを購入し、たまに家のなかで飛ばして遊んでいる。それなりのカメラもつ

いているが、乱雑な部屋の中を撮影しても仕方がない。狭い部屋のなかで、障害物を避けながら、操縦のスキルアップに務めている。

国道16号線

最近になって、国道16号線「日本を創った道」（柳瀬博一著）という本を呼んだ。最初に書店で見かけたとき、大胆なサブタイトルだったので、以前より気にかけていた本だ。数多くの参考資料に基づいて、関東地方のこの「16号線エリア」と呼ぶべき地域の地形や歴史から、この道のすごさを記述し、強調している。「国道16号線エリア」は、3万年の旧石器時代から現代に至るまで、日本の社会、経済、文化の形成に大きな役割を果たしてきたと論述している。ユーミンなど戦後の日本音楽と国道16号線との関係などが記述されているのも面白い。「地形」、「歴史」、「道」、「音楽」といったキーワードは、自分にとってどれも興味を惹かれる言葉だ。「日本を創

った道」と言えるのかどうかは別として、国道16号線を多角的に論述しているのは確かだ。

この著者は、国道16号線について、相当な「思い入れ」を持つている。誰でも、利用している国道などについては、その人なりの「思い入れ」があるはずだ。自身も国道16号線の一人の利用者として、「思い入れ」の一端を記述してみたい。(以下、国道16号線を16号線と呼ぶ)

16号線を始めて意識したのは、勤務先の事務所が横浜市南区のときだった。事務所の前に川があり、川を隔てたところに、16号線が南北に走っていた。そこから、北へ向かえば吉野町から関内方面へ、南へは磯子を経て、横須賀方面へ向かうことができる。たまに横須賀方面にも出かけたものだ。ちょうど、その年代(1975年)は、ダウンタウン・ブギウギバンドの「港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ」が流行っていた頃だ。社員旅行のバスの中で、調子よく大声で歌っていた者もいたので、よく記憶している。まさに16号線だ。ただ、16号線が

一回りして、柏、千葉方面にたどりつくことなど、当時も考えてもいなかった。千葉方面(千葉市、習志野市、白井市など)へは、仕事で、車でたびたび出張していたが、当然ながら首都高と京葉道路を利用していった。

柏には1985年に転居している。住居は16号線から約200mしか離れていなかった。日常生活でも頻繁に利用していた。交通量は当時から多かった。同じ町内の知人は、マンションの比較的高い階に住んでいたため、窓を開けたときなど、直接、16号線の交通騒音が届いていた。深夜になっても、車が途切れないので、16号線を「眠らない道路」と称していたくらいだ。この頃すでに、市役所勤めの隣人からは、千葉県北西部の16号線についてはバイパスの構想があると聞かされていた。それは、現在、千葉北西連絡道路と呼ばれているもののように、印西市域の千葉県道61号線の利用も候補の一つなのかもしれない。ただ、いまだに構想、検討中のようなだ。

16号線は、東京都心を中心とする一般道路の環状道

路であるが、あまりきれいな円状にはなっていない。環状道路として指定されたのは、1962年のことだ。旧来の道路とつじつまを合わせながら、苦勞して路線を決めていったように思われる。そのなかで、野田市から千葉市あたりまでは、新たに設定したらしい比較的直線的な路線になっている。これらの区間は、建設計画当初、下総台地でもまだまだ既存の開発地が少なく、路線設定も現在のような難しさはなかったかもしれない。自分がよく利用している柏から八千代あたりまでは、とくに直線度が高い道路になっている。

さらに、地形的に面白いのは、柏から八千代あたりまでの区間の台地には、手賀沼、印旛沼へ接続する多くの河川（低地）が存在する。そのため、それらの河川を横切るたびに、アップダウンの繰り返しが続く道路になっている。昔からある道路は、通行の主体が人間や馬などなので、地形に応じて、距離は長くなっても、できる限り渡河が少なく、アップダウンの少ない道筋が選ばれた。尾根筋や谷筋の道が主体であった。千葉県北西部周辺では、我孫子市の国道356号線や千葉県道59号市川印

西線（木下街道）は典型的な昔からの尾根筋の道路だ。少なくとも柏から八千代あたりまでの16号線は、自動車の普及を前提とした、アップダウンを気にしない現代型の路線設定になっている。

関東地方には、都心から地方に向かう一般道路や高速道路に対して、都心を中心とする環状道路がいくつかある。一般道路では、内側から、内堀通り（環一）、外堀通り（環二）、外苑東通り（環三）、外苑西通り、不忍通り（環四）、明治通り（環五）、山手通り（環六）、環七通り、環八通りがあり、少し離れて16号線がある。高速道路では、やはり内側から、首都高都心環状線、首都高中央環状線、外環道（東京外かく環状道路、一般道路の国道298号線が並走）、圏央道（首都圏中央連絡自動車道）がある。各道路は、それぞれの位置で、環状道路としての役割を担っている。

16号線は、都心から約30km圏で、外環道と圏央道の中間にある。一般道路であることが大きな特徴だ。高速走行はできないが、高速料金がかからないメリットが

あるので、16号線を利用するドライバーも多い。高速道路は、IC（インターチェンジ）を点と点で結ぶ路線であるが、16号線のような一般国道は、都市沿線を線で結ぶ。したがって、この違いにより、一般国道では、沿線および沿線の近くが、住居、商業ビル、レストラン、物流センターなど多様な建築物や施設の立地場所となるが、高速道路では、ICの周辺だけが立地の中心になる。計画、構想時の時代背景は異なるが、たまたま、16号線は一般道であるからこそ、多様な発展ができた。

都心から30 km程度離れている都市は、将来発展すると、よく言われてきた。千葉、柏、大宮、川越、立川などは、この20〜30年の間、それぞれの内側の都市より発展のポテンシャルが高かった。東京圏全体が発展していく中、東京のベッドタウンとして、少し離れた地価の低い郊外が発展していくのは当然として、この都心から30 km程度が、ちょうど16号線と重なったのも発展の要因になった。

東京から見れば、16号線の沿線は少し遠い郊外であ

る。ただ、そこに商業施設などが集積してくれば、さらに遠方の人々は、東京まで出かけなくても、ある程度の買い物などができる。もう少し都心に近いところまでと思っても、それならば、都心まで行った方がいいと考えてしまう。16号線沿線の都市が、その周辺とさらに遠方の人々の経済活動の受け皿になった。

16号線全体から見れば、いつもよく利用している柏〜八千代間の沿線開発は、遅れているように思う。それでも、この数年で商業施設なども増え、驚くほど大きく変わってきている。

いつも利用させてもらって恐縮なのだが、16号線には一っだけ不満に感じていることがある。全般に、車と路面の摩擦による走行音が大きく、車内での騒音がひどい箇所が多いことだ。16号線のように、交通量が多い路線は、道路舗装が痛みやすく、補修の頻度も高くなる。年末、年度末の工事が多くなって、渋滞も発生する。渋滞は仕方ないとしても、この音を何とかしてほしい。16号線のこの辺りでは、いわゆる高機能舗装が使われて

いるようで、これが悪さをしているのではないかと思っ
ている。高機能舗装とは、空げきのあるアスファルトコ
ンクリートを表面の層として施工することによって、騒
音低下、雨天時の水しぶきや水はねを抑えることによる
視認性の向上、さらに対すべり性の向上、夏は路面の上
昇を抑えられるなど、いいことづくめの舗装である。排
水性舗装とも呼ばれている。しかし一方で、施工が難し
く、経年により空げきが目詰まりして、メンテナンスが
大変になるというデメリットがある。一旦、目詰まりす
ると、いいことが逆になり、騒音もひどくなるのではな
いだろうか。16号線はこのような区間が多く、車で音
楽を聞くのも厳しくなる。周辺の市道などでは、このよ
うな状況をあまり感じたことがない。今後少しでも良く
なって、快適に走行できる国道になってほしいと思う。

1969 (いちきゅうじゅうくじゅう)

たまたま「1969」という由紀さおりとピンク・マ

ルティニーによるコラボレーションアルバムを聴く機
会があった。2011年10月に発売されている。19
69年は、由紀さおりの「夜明けのスキヤット」が大ヒ
ットした年で、このアルバムはその頃の年代にちなんだ
曲を集めたものだ。由紀さおりの透明感のある歌声が健
在だ。1969年は、自分にとっても特別な年だった。
親元を離れ、大学入学のために上京し、東京およびその
周辺で暮らし始めた記念すべき年だった。その頃は、深
夜ラジオを聞いて、よく夜更かししていた時期だ。由紀
さおりの「夜明けのスキヤット」やピーター（池畑慎之
介）の「夜と昼のあいだに」などは、深夜族を象徴する
ような曲だった。1969年頃の曲は、今でもなじみ深
いものが多い。

最初に、アパートを借りたのは、新宿区淀橋（現在の
西新宿六丁目）で、新宿駅西口から徒歩十数分くらいだ
った。淀橋は、その頃、新宿区の1地区に過ぎなかった
が、もともと由緒ある地名だ。豊多摩郡の淀橋町が過去
に存在し、淀橋区（現在の新宿区西部）、淀橋浄水場、淀

橋台（武蔵野台地の東端部）にもその地名が使われている。その後、新宿駅西口に開店したヨドバシカメラもこの地名を流用している。

当時、新宿西口の高層ビル群の最初のビル、京王プラザホテルが建設中で、目を追うごとに高くなる様子を見ることができたときであった。新宿駅西口の一带は、もともと淀橋浄水場跡地を利用した「新宿副都心」計画の初期段階であった。浄水場の撤去跡はまだまだ見ることができた。

アパートは、青梅街道を中野方面に向かい、新宿警察署の前を通って、成子坂下まで行き、そこから南へ少し入ったところだった。成子坂下には、昔ながらの映画館や銭湯があり、この銭湯には何回かお世話になった。あるとき、深夜にしては客が多かった日だった。そのとき驚くべき光景を目にした。自分を除く客の全員が立派な刺青をした人たちだった。実際の刺青などをめったに見たこともない自分にとっては、驚いたというより、怖かったというのが正直な気分だった。あたふたと風呂に入ってその銭湯を出たが、その後、その銭湯には二度と足

を運ぶことはなかった。成子坂下から大久保駅方面へ向かって、柏木という地名の町があったが、多分そのあたりに多くの関係者が住んでいたのだろうと思う。大久保駅の近辺は、ラブホテル街で有名だったし、その先の新大久保駅の近辺は、今やコアタウンだ。昔は、風紀上あまり良くない印象だった。

住んでいたアパートの周辺は、現在では、副都心計画も完了して整備され、そのアパートも何処にあったのかもわからないくらいだ。ただ、ストリートビューで見ると、その後、何度か駐車違反でお世話になった新宿警察署もそれらしいところがあり、「成子坂下」というバス停留所も確認できる。やはり、この辺りが自分が住んでいた所なんだと納得できた。ストリートビューでさらに、成子坂下から青梅街道を中野坂上方面へもう少し下ると、橋がかかっている。この橋から先は、中野坂上に向かって上り坂だ。橋名板をよく見ると、「淀橋」と記されている。これが、「淀橋」で、流れているのは神田川だということだが、今になってわかった。橋の前後の青梅街道

の坂道は、神田川が削った谷によるものだった。

当時は、まだ高いビルが少なかったので、住んでいたアパートの近くからでも新宿駅方面の上空を見通すことができた。夜になって、駅方面を見渡すと、ネオンサインの光とスモッグが一体となって、駅の上空全体がうす紫色のもやがかかって見えることが多かった。公害問題がクローズアップされた時代だった。

1969年は、まだ学生運動が激しく、入学しても半年は授業がなかった。たまたま入会した学校のフォークソングのサークルが時間を費やす場所であったりした。サークルといっても、バンドの集合体みたいなものなので、それぞれのバンド活動が主体だった。自分が始めてバンドを組んだのが1年の途中なので、活動したのは1年から3年までの実質2年間くらいだ。フォークソングといっても、アメリカンモダンフォークと言われた、ピーター・ポール&マリー、キングストン・トリオ、ブラザーズ・フォードなどのコピーバンドが多かった。もちろん、日本のフォークソングのコピーも多かったし、オリ

ジナル曲を手がけているバンドも多かった。なかには、オリジナル曲を作って、日本語のロックをやりたいといつて、実現しているバンドもあった。また、在学中からプロとして活動しているバンドもいくつかあった。そんななかで自分は、2つのバンドを経験しているが、主にサイモンとガーファンクルやボブ・ディランなどのフォークロック系の曲を志向していた。その頃、よく聞いていたのは、バーズ、バンド、CSN&Y、ニール・ヤングなどで、やはりアメリカのものが多かった。

実は、1969年は、世界の音楽業界にとっては重要な年であった。その年に、アメリカでは、ウッドストックフェスティバル、イギリスでは、ワイト島ロックフェスティバルが行われている。これらのイベントは、ロック史上画期的なもので、その後のポップスやロックなどの方向性に多大な影響を与えたイベントだ。自分は、その当時はそのような出来事は全くわからず、関心を持つようになっただけで、後になってのことだった。

サークル出身者は、同期を含めて、卒業後も音楽関係の仕事に就いている者が多かった。ディレクター、プロ

ジューサー、アーティスト、レコード会社、PAエンジニア（パブリック・アドレスという職業で、コンサートなどで音響設備を操作・調整する技術者）、カラオケ配信会社、楽器制作会社など様々である。まだまだプロのアーティストとして活躍している人もいる。仕事の大変さは別としても、それぞれ好きな仕事に就けるということは、ほんとに羨ましいことだ。

もう一つ思い出がある。1969年は、新宿駅西口のベトナム反戦運動、いわゆるフォークゲリラの強制排除事件があった年だ。その事件の余波で、電車が止まり、学校から新宿のアパートまで電車で帰れなくなったり、学校から新宿のアパートまで電車で帰れなくなったりがある。そのとき、たまたまバンドの仲間たちが自分のアパートに泊まることになっていたので、仕方なく歩いて帰ることにした。アパートに帰るには、新宿駅を避けて行くことができるのだが、みんなギターケースを持っているので、途中警察の職務質問を受けてしまった。誰もフォークゲリラとは何の関係もないのだが、火炎ビンなどが入っていないか、全員、ギターケースの中を調

べられた。ささいなことであるが、このようなことはよく記憶に残っているものだ。ちなみに、ギターケースは、みんなハードケースだった。現在普通に使われているソフトケースやバックパック型のケースは見かけなかった。譜面台も所有した記憶がなく、当時は歌詞もコードもすべて記憶して演奏していたことを改めて認識した。

1969年（昭和44年）から半世紀経った2019年は、平成を経て、令和に改元された年だ。現在（2022年）は、すでに53年経っている。1年や2年では大きな変化を感じないが、半世紀以上も過ぎれば、あまりに多くのことが劇的に変化してしまっている。まさに浦島太郎の心境だ。これから、また半世紀過ぎれば、さらに、大きな変化が起きているだろう。自分たちの世代はその未来の姿を見ることはできないが、デジタル関係だけでも、すでに、メタバース、NFT、Web3.0など次の時代の予兆が見え始めている。